



坪内学長



赤坂理事長

今、大学は？

昨年、新聞紙上に京都精華大学の記事が取り上げられ、経緯と謝罪の文章が送られて来ましたが、今、大学はどうなっているのかと思う方々の声を聞き、赤坂理事長と坪内学長にお話を伺いました。

少子化、学生獲得

谷：今、大学も様変わりしてきていると思うことで、色々お話を聞かされていると思います。まず、世の中が厳しい状況になって来ている中、加えて少子化と言ったことで、他大学では姉妹校をつくらして将来の学生の確保にやっきになつてきている感じがしますが、精華はいかがですか。

坪内：日本は今、大変な時代にたつています。大学も然りです。私学は教学の充実と学生の確保の両輪で存在するわけで、セイカも各学部、各部署が協力しあつて、他校に類のない大学づくりをしていくことが重要でしょう。

谷：震災で影響はありますか。

坪内：当然あります。直接的には被災地域出身の在学学生は四十六名で新入生は十四名でした。おかげで全員無事でしたが、これらの学生に新生活準備金の支給や今年度の学費猶予などの援助をしています。また、この夏休み、福島の子供たちに思いっきり屋外で遊んでもらおうと、卒業生がキャンプを企画しました。宿泊所として留学生施設を提供しました。これからも、大学として出来ることは支援していきたいと考えています。

谷：学生獲得に何か具体的なことは。

坪内：現在、学部やコースの再編や定員の見直しを検討中です。具体的には発表できる段階ではないのですが、二〇一三年には実施したいプランもあります。基本的には、やはりセイカらしい、セイカならではの特長ある教育を充実することになります。卒業生の皆さんの活躍も含めて、それを世の中に伝えていくのが学生の獲得につながると思います。

赤坂：少子化の中でどう生き残っていくかと言う問題ですね。これからの大学は何よりも特色を明確にし、そしてそれが評価されて支持されることで選択されます。それには建学の理念を教育に反映させ、学生生活のなかでこれを伝えていかなければいけないと考えています。そのためには京都精華大学の教育の特色を明確にした全学共通の教育を推進していく必要があると考えています。

谷：共通教育ってどう言うものですか。

坪内：本学の全ての学生が履修する大学人としての核となる共通科目群で、昔の一般教育に近いものです。教養、語学、リテラシー、キャリアの四科目があります。

赤坂：その中に大学ナビと表現ナビと言うのがあって、大学ナビでは学長と僕が、一九六八年の開学時はどんな大学だったか、岡本清一先生はどんな先生だったか大学の歴史や出来事などを入学生に伝えていまして。飲酒の問題なども取上げています。そう言う科目を必須にしています。

谷：科目になるのですか、授業として……。

坪内：また、学生のキャリア形成を支援するために、各部署が連携したハブ組織「キャリアデザインセンター」を設置しました。単に就職先を紹介するのではなく、在学生のプレゼンテーションシステムの構築や、企業との連携、さらに卒業生クリエーターのサイトを立ち上げ支援もしています。

赤坂：今まで就職部というのがありましたが、キャリア支援室と言う名称に変えました。履修やインターシップなどのアドバイスや、卒業してからの進路を含め支援をしようと言う組織に変えたんです。

谷：昔の就職部であったような、自分に合った職業のカードを選んで紹介してもらおうようなシステムではないのですか。

赤坂：うちの学生は就職を希望する者だけでなく、自己の活動を通じた社会への貢献や表現を望む学生もたくさんいるので、そういった活動を継続しながら生活していくための手段や方法などのサポートも含めていくつもりです。そういった大学の特色を明確にしていくことが志願者から評価を得られることになると思っています。

もちろん高校との提携も積極的に進めています。精華大学を理解してもらった上でその高校と協定を締結させてもらっています。

現在の学部は？

谷：英文科が無くなってからの学部は今のようになってきているのですか。



坪内：芸術学部と人文学部の二学部だったのが五年前の二〇〇六年にマンガ学部とデザイン学部が出来て四学部になりました。

谷：四学部にされて、何か大きな動きはあったのでしょうか。

坪内：精華大学はデザインとマンガが学部になったことで、対外的にも社会的にもセイカが新時代の文化、表現の分野を切り拓く大学であるというメッセージが確かに上がったと思います。よく、マンガの大学と言われるのも特長のある大学として象徴的に語られている部分が大いのでないでしょうか。先に申し上げた再編もこの延長線上にあり、四学部を根っ子として、また新たな芽を出すということですね。

谷：授業をどう育てていくかと言うことですね。

坪内：ええ、一九六八年に生まれ、育まれたセイカの教育が基ですから、今までと違う流れの学部やコースが出来るといふ乱暴なことではありません。

赤坂：今、考えている再編などの考えは二〇一三年の四十五周年をめぐり、さらなる発展を目指そうとしているところですね。

大学からの告知、謝罪

谷：話は変わりますが、昨年、学内で未成年の女子学生が飲酒事故で亡くなったと言ったことがあり、その後、全卒業生に経緯と謝罪の文章が送られて来たのですが、色々聞いてみますと、なぜ自分まで送られて来たのかと思つている人が多いようですが。

坪内：確かに卒業生には直接関係ないことでしよう。しかし以前からセイカは、教職員や学生間の人間的な関わりの中で、お酒のもつ意味は大きかったと思います。今回のことは今までは普通に行われてきたことから起こつたわけで、皆さんにもお知らせする義務があると考えました。その日常的な大学の体質の中で一人の未成年学生が亡くなったわけです。今までもっとも大切にしていた人間尊重の精神を大きくゆるがす結果となったのです。自由自治という言葉だけが形骸化し飲酒に対する問題意識が欠けていたのではないかと。組織が大きくなり大学の管理責任が薄くなつてきているのではないかと。など今までのセイカを見直す必要があると思つたからです。

花見事件

谷：そんな中で、五月に地元紙の記事になった花見の不祥事というのはどのような経緯だったのですか。

坪内：事故以来、大学施設では飲酒しない。もちろん未成年には勧めないし飲まない。そういうことを徹底してしました。その矢先、過去の流れみたいなことで、あるコースで未成年も参加していた花見会が開かれたのです。そこに教員も同席していたことがわかり、大学責任で懲戒処分にしたということです。これは、社会的に私をはじめ大学の責任は重大で卒業生の皆様にも深くお詫びいたします。

大学祭とお酒

谷：大学施設と言うのは、丹後や朽木、レオなど含まれるのですか。

坪内：勿論です。今後は学外の施設はどうするか、大学祭はどうするか。学祭をしてはいけないと言つてはいけません。お酒と祭りはイコールではないので、飲酒をしない祭りをどうするかと言つては学生の代表と話をしているんですけども。

谷：五月祭は中止になったようですが、木野祭はどうでしょう。

坪内：実行委員会も発足し、やろうと思つていますが、お酒だけが祭りではないので、お酒が無いことで逆に大学祭の意味を問うたり、新たな大学祭にするということを探索したりしています。今の学生は別にお酒がどうと言うのはあまりないんですよ。時代なのかなあ。

谷：タバコも車も欲しくないみたいですね。私達の頃はそれが大学生で大人の仲間入りと思つていましたよね。

赤坂：お酒を除いて木野祭の意味を問うと、目的が見えなくなつているところもあるしね。ここで冷静に考えたら、木野祭ってどういうものなのかってことですよ。

谷：表現の大学なんですし文化祭みたいなことでも良いのでは。

赤坂：今から新たなことを始めるには時間が足りないかも知れないね。

坪内：違う形の祭りを再生していったらうと言つてが大切な。昔はファッションショーや御輿を作つたりレースをしたり、プール作つたり。何か誰もがイベントを楽しんで盛り上がったんですよ。個人だけの表現ではなくて、みんなでひとつのテーマを作り上げるものが出来たらいいと思います。昨今、個人やグループだけで模範店の売り上げを楽しんでいるみたいところがあつて残念ですね。

日本中で価値の見直しが始まつている今こそ、京都精華大学も新しい木野祭の意味を考える時期であるかも知れませんね。

谷：ここで少し立ち止まって、精華の良いところを残しながら今の時代に合った表現の大学、精華らしい発信が出来ると思います。本日はありがとうございました。



谷 木野会会長

二〇一一年八月九日京都精華大学にて
赤坂 博 理事長
坪内成晃 学長
谷 眞美子 木野会会長